

もの創りできる人たちの事すごくかつこいいと思っ

て。けどその人たちに僕はなれなくて

語り手 二宮理史(高校二期生 金融業) 聞き手 谷野雫月

*

—まずちよつと、高校時代に何をやってたかをお願いします。

このお話もらってから考えてはみて、何やってたっけなって。色々あった高校時代ではあったんだけど、今の友達から思うと、何もなかった高校三年間かなって思ってた。修学旅行とかさ、海外研修か。行く先の数が全然違うし、行ってやることも違うし、その上、僕らは鳥インフルで中止になったから。結構色々、まあコロナの時期の友達からしたら恵まれてると思うんやけど。何やってたかっていわれると、部活と、イベント活動。あれ正式名称忘れてしまってた。国際水フォーラムかな、滋賀県琵琶湖があるので、世界の高校生と一緒にやりましょうっていうのがあって。第一回が高三の時にあって、準備委員会みたいなやつて。高校生活の半分ぐらい。高二の途中から準備がずっとあって。高三に本番がある形であって。それをやってたのが高校生時代かな。

—その水のフォーラムについては。

それが結構難しくてさ。今まだあんのかな、科学部みたいなありません？

—サイテック部ですか？

—そうそう(笑)。それでサイテックの子達で、琵琶湖の水質調査と、生き物かな、調査みたいなのをやってた。そこから始まったんだけど、私はどちらかというとそういうのに興味があったんじゃないかって、運営す

る人。ただ単純にもう段取り組んで、いつまでに書類作って、当日、人がどういうふうに動いてみたいかな、会場スタッフの方のポジションが好きで。それでたまたま、ある同級生の女の子が一人いて、その子が委員長をして。英語できます、環境興味ありますっていう子で。その子は結局卒業してからオーストラリアの大学に行った子なんやけど。その子が委員長で前に立つ分には百点。でもなんかいるんなもんを準備するのが苦手で。で、その補佐で僕が副委員長で。だから何をやってましたかっていわれると、事務をやりました。

—その会場はリツモリでやってたんですか？

うん、当時、先生らでいうと、太田先生らが顧問みたいな感じでつくってくれて。基本的には中庭にある教会やった、なんやったっけ。左側の部屋を当時一時期貸してもらってた、こもりつきりで放課後とか作業をしたりして。部活に行かへん口実とかにしてたな(笑)

—コミュニティセンターですよ。

うん、そうそうそう。当時は、結構、熱狂的にそのイベントに関してはやってきた気がするなあ、自分たちは。周りがどうやったかはわからんけど。

*

高校時代の進路

—大学の学部はどうやって決めましたか。

それも、今までのことを振り返ると、高校時代の僕の意見、それは今全然そんなことないやんってことなんですけど。当時、まじで進路指導の時に相談してたのは、僕大学行きませんってことを言ってた。高校生の頃に夢が、製菓に進みたいっていう。

—製菓ってお菓子を作る。

そう、その道に進みたいですっていう話をしてて。だから製菓の専門に行きたいと。はたして、それをエスカレーターのように私立高校に高校から入っていただきながら、大学に行かずに専門学校に行きますっていうのはどうなんだっていう話を親と先生といろいろしてて。そのべつに怒られてたとかじゃなくて、僕もそれを悪いと思ってたから。みたいなことを言っていて、それで最終的には、製菓の学校は専門なので、言い方悪いけど、行こうと思えばいつでもいけると。だから大学卒業して、それでもまだそれがやりたいと思ったら卒業後に行ったらいいと思うし。また社会人なってからでもいいけるよねってなって。本気でやろうと思ってた。じゃあ、もし、ほんまに潰しがきく、かつ、もし自分がやりたいことに進んだ場合でも、全く役に立たへんやんじやないことってなんやろうって思ってた、結局、経営にいった。全然想像してたのとは違いますけどね。当時はそんな感じで、まあもし、今後ほんまにそういう道に進んだとて、もし自分で店やるってなった時にビジネスのことって分かってないといけないよねってなって。経営を選びましたね。

—経営ってその当時から人気でしたか。今でも経営は人気なんです。

僕らの時はまだ南草（BK C）のところにあって。今は大阪やけど、それがどれぐらい影響してるんか。まあでも高校生が考える経営学部ってべつに、そんななん何に役に立って、そこにいったとてべつに起業ができるわけでもないし。とは思うけど人気は人気ですよ。

—大学生の時に、高校時代にこれやっというてよかったなって思ったことはありますか。

今の、授業のスタイルがどうかはわからへんけど、僕たちは大学受験がない分、損した部分もあって、単純に英単語の数が少ない（笑）。やっぱりセンターを受けてきた子たちと違って、知識量が少ないみたいな

ものはすごくハンデかって。ただ一個、僕らの時代って、口で生きてきた人間が結構多くて。人前で喋るのが嫌いじゃない。何か物事を考えてディベートするのも苦手じゃない。とかっていう子らが結構多くて。勉強できることに対してっていうか、意味はあったけど、そんなことより人前で喋れてなんぼみたいな感じの雰囲気があって。それは、けど、大学行ってから、というか社会人になった今でもかなりやなって、すぐえ思いますね。あの、プレゼンできないし、プレゼン資料作れない受験生は大学行ったら多いので。目つけられると大体全ての作業を任せられるっていう目に遭うんやけど。それでも知識はね、どうにかなる。今は知識を持つてただけでプラスにはならない時代で。今はやっぱり自分の思っていることを自分の思っているように人に伝えることの方が案外大事。と思うと、なんやようわからん英語で劇させられたとかって、記憶がありますけど、中間テストは劇みたいなの（笑）。国語のテストの新聞記事が一面ぼーんって出てきて論理的におかしいところを考えましようみたいな。のみ（笑）。最高点数百五〇点とか。試験勉強も特になくて。出てきたものに対して自分がどう思ってるかを考えるっていうか。まあどっちも大事やけど、まあそういうのがあったのは大学入った時は有利やったんじゃないかな。人前で物おじせずと言えるっていうのは。

—高三の時のフォーラムの経験はどうですか？

どうなんやろね、どっちが先かみたいなん若干わからん部分もあるけど。そういうのもあると思う。そうやって多くの、自分より上の人、下の人とかを巻き込んで物事動かしていった。けど、僕らが言われたことをただただやるっていうよりは、自分たちがこういうふうにしたいっていうのを考えて、説明して、じゃあその場面に必要なもの、必要なものは何か。今はわからんけど、当時は先生らと対等に話をでき

て、こういうふうに行きましよう、こんなもいいですねって。オーブンゲームビーの絵コンテ書いたりしてたんですよ。そういうなにかも、何を伝えたいと。そうやってたのは、一つ自信とかにはまあ繋がってるんやろなあとは思いますがね。

*

聞き書きに参加した理由

理由か。単純に面白そうやなってすごい思ったのはある。今りつもり二〇年経って、めっちゃ学校の雰囲気も、卒業生の雰囲気も変わったと思う。この辺りはどっちがよかったっていう話ではなく、結構やっぱり一期、二期、三期ぐらい。動物園みたいやったよね（笑）あのできたての学校、まあ上に守山女子の先輩方おられましたけど。

―三年生が守山女子の。

そうそう、僕らが行った時は三年生が守山女子のっていう状況でしたけど。やっぱりまあこういういろいろ、公立から私立に変わったとか、女子だけやったのが共学になったとか。しかも「もりじょ」って被服科とか、服飾科とか食べ物とか、結構そういう元々女学校の流れを含んでる高校なので。そういう学科が多い高校で。そこからほんまの普通の総合の学校になって。守山女子の先生もいる中で、新しくきた立命館の先生もいて。で一年目、二年目、三年目とかまでは良くいうと、先生との距離もやっぱり近かったし。こうやって卒業してからもプライベートで付き合いのある先生たちもいたりとかいうのもある。僕らとしてはいいと思うてる。ただいろんなこと決まっていかなかったし。今となってはなんかなえらい進んで、ええなあと思う部分もやっぱりあったりする。さっき行った海外研修、僕らなかったから、修学旅行を別で三月の三週目とかに沖縄、急遽行くことになって。とかっていうのも、まあそこも一悶着あ

ったりして。基本なんか、揉めてる学年ではあったんですよ（笑）仲が悪いとかじゃなくて、主張がみんな激しくて。何か一個やるつつてもいや俺はこうや、私はこうやって言いながらやってる学年ではあったし。僕個人も高三の時、「単位やらへん」って先生から言われたことも結構本気であって。言われたなあ。大丈夫やったけど。あったね、そんなこと。八反先生が（笑）。まだいはるんかな。

―去年担任の先生でした。

その八反先生から、直々に目を向けて、そのままで行くんやったらお前らには単位はやらんって言われたことはありますね。何も悪いことを僕たちはやってないと思ってるんですよ。高三の授業で世界貢献？ 社会貢献みたいな特別授業があって、ホールに学年集めて三人か四人で一組で班を作って半年かけて高校生にできる社会経験、世界に貢献するってなんだろうみたいなことを考えて発表しようっていう授業があった。高校生でもできること、みんな考えたわけなんですけど。その中で僕を筆頭に、まあとある班がですね。何もないだろうと、高校生ごときに（笑）。高校生で何かがしたいと思ってる子達は自分で勝手に動いてやっていると。何かしたいと思ってる子達は自分で勝手に動いてやっていると、実際に身の回りに確かにいたんですよ。さっき言ったオーストラリアに行った子も基本的にそういうタイプで。私はこういうことがしたいって高校時代から自分から動いてちゃんとやってた。高校生の時代に何も動いてない子達っていうのは、多分何を言ったって何も響かないし、何もやらない。じゃあこの子達が自分で何か社会に貢献したい、社会の一員になりたいって思った時に何が大事か。何を高校生の時にしておくか、勉強ですっていう発表を作ったら怒られたなあ、怒られた（笑）。いや勉強でしょって高校生たるもの勉強して自分が何かやりたいことに

気づいた時に足枷にならないレベルの知識量と、考え方と社会のことを知っておくっていうのが確実に大事で。そんな興味のない時にやれやれって言ったって、みんな嫌になるだけで。英語興味の無い時に英語やれ、英語やれって言われてもみんな興味なくなるだけで。ただ英語ほんまにやりたいとか、海外行きたいなどと思った時に不便じゃない程度の英語力は多分持ってた方がいいと思うので。そういうのって多分受験勉強やったりとか、そういう筆記の勉強やと思うんで。高校生たるものの勉強しましうっていう発表作って八反先生に怒られたな(笑)。なんで怒られたんかいまだにちよつと良くわからへんねんけど、なんで怒られたんですかね。ホールでなあ。しかもそれ中間発表で、誰から発表しますかって言われて、いの一番に手挙げていったろって。僕その時スピーカーで、発表時間五分や言われてんのに八分ぐらい喋った、一人で。で終わってから怒られると。怒られたなあ、どうするって。このままいったら単位やらんぞって。なんでですかって言うって。おかしいやろって、あの授業の趣旨を考えろみたいな。ちよつとマイルドにしましうって言われて。ほんまにちよつとだけマイルドにしてそのままやりましたけど。

―単位もらえましたか。

ちやんともらえました(笑)。ギリギリやったけど。ごめんなんの話をしたかったかっていうと、出来立ての学校、決まってるじゃないこともいっぱいあり、今の友達と比べるともしかしたら授業のレベルとか、別に先生が悪いとかって話じゃなくて。単純にいろんなカリキュラム、積み上がったカリキュラムがない中でやったので多分先生らも試行錯誤をやっていたいて。今から振り返ってみたらiPadもなかったりとか、設備的にもグラウンドもなくて違うとこのグラウンドまで行って部活してたと

か、いろんな不便やったこととか、良くなかったことっていっぱいあると思うんですけど。ただその分、先生と学生との距離も近かったし、お互いが多分手探りでいろんなことを考えてた。こういうことやりませんかとか、こういうこと嫌ですとか、しょうもない反対運動してたりとか。っていうのもあったなと思うし。そういう面で一期生、二期生、三期生とかその辺の世代は、本当にこの学校ができあがっていくタイミングっていうに入れて、あれはあれでやっぱ面白かったな。そういうのがすごく嬉しい。結構自分たちで手探りで作っていかなきゃいけない。これあつてんのか、あつてないのかとか。そういうのやるたびにまた良くも悪くもさ、いろんなことを考えて。喋るの好きな人間が集まっちゃったからさ、文句を言うわけよ。これはおかしいと思いますって。まあその辺は試行錯誤しながら。なんか決められたことだけを、これやっというて、了解ですっていうのではなかったのは、よかったんじゃないかなって言うふうには思います。

*

―何人かと一緒にこの二十年史に参加されたんですか？

はじめは誰かが見つけてきて、おもしろいつてなって、ただその集まってくる連中ってさ、似たようなところにずっといたからさ。みんな属性が被りまくってて。だから全員応募するのはどうかとはなって。でもいやもうそんなん、なんでもありやろってなって。もっと多分僕らの同級生とかでも、たとえば大学卒業してそのまあ起業して会社やってる子達とか、インタビューしがいのある人たちっているやん。そして働いてからそういうの言ったら僕らは平凡やし、当時もそんな学校の中心にいたわけではなかったし。どうせ俺ら通らんって言って送ったな。そんな特筆すべきこともなかった、めっちゃめっちゃ輝いた高校生活でもなか

ったし。まあ唯一国際水フォーラムっていうなんとなく世の中の的にはお
つきいイベントに裏方ナンバー二ぐらいで関わらせてもらって。こんな
普通な人がいてもいいかなって思って参加しました。

＊

振り返ってみて

今日この話をもらって一回振り返ってみると、その時は何も考えてな
かったけど、結局ものを作るのが多分好きなんです。企画してどうこ
うとやってよりかは、何に関しても形にするってことが多分好きで。た
だ製菓を諦めた一番の理由は、綺麗にケーキを作れないんですよ。自分
や家族食べる分には全然耐えるものが作れる。味は大丈夫。ただ売れる
見栄えのものが作れるかといわれると、それがもう壊滅的に無理やつて
言うことに気づいて。ああーってなったんですね。結局、高校時代か
ら企画したりとか、自分の思ってるものを形にするってことは多分好き
で。逆に言うとそのができる人に対するリスクペクトってのが多分すご
くあって。もの創りできる人たちの事すごくかっこいいと思って。けど
その人たちに僕はなれなくて。理系にいつてものを創る人になったりと
か、メーカーにいつて本当に何か作業をする人にはなれなくて。文系に
いつてそれとどう関わるかって考えると、就活の時はやっぱりものの創り
の会社にいつて、その創ってる人たちを裏で支えるっていう職種を探し
てたんだけど、縁があつて金融になつて。やっぱりその人たちを支える
一つの形として金融業っていうのはあると思います。高校時代に関わつ
てきたようなところで、案外そういうやり方、自分の気持ちとかをどう
表現するか、その一つの形で企画運営に関わつてその世界で今生きてる
なつていうのは三十いくつになつて振り返ると思うところではありま
す。高校生の、当時に毎回そう思つてたかつて言われると、全然そんな

ことはないんやけど。だから振り返るとああ高校生時代ああいうことを
やつて、案外そこからハマつたのかつていうふうには思います。

【感想】

高校時代に熱中したことが、今の生き方にどう繋がっているのかを丁
寧に語ってくれた。自分の得意なことを見極め、裏方として誰かを
支えることに、誇りを持つていることがお話を通して伝わってきた。話
を聞きながら自分自身も「何が好きで、何ができるのか」を問い直す機
会となった。



右：語り手 二宮理史さん
左：聞き手 谷野雫月